

The TENDAI journal

発行所：天台宗出版室
発行人：出版室長 寺本 亮洞
〒520-0113 大津市坂本 4-6-2
天台宗務庁内 電話：077-579-0022(代)
Eメール：T-Press@tendai.or.jp

令和2(2020)年10月1日 木曜日
(毎月1日発行) 1部50円(消費税込・送料別)

天台ジャーナル



広報天台



550年ぶりに神仏習合の祈りが

森川宏映天台座主猊下は9月4日、京都市上京区の北野天満宮(橘重十九宮司)において応仁の乱後に途絶え550年ぶりに復興された北野御霊会に出座された。比叡山延暦寺一山僧侶による法華経を講説する「山門八講」が営まれ、森川座主猊下が神前に祭文を奉じ、世界の平安と新型コロナウイルスの早期収束を願い玉串を奉奠された。【4面に関連記事】

平安時代の古儀が今よみがえる 北野御霊会を再興

北野御霊会は、永延元年(987)に一條天皇により始められた勅祭北野祭期間中の神事の一つであり、菅原道真公(菅公)の御神霊を慰め、世の平安を祈願したとされる。「山門八講」も北野祭の際に営まれていた。しかし応仁の乱によって断絶し、元治元年(1864)には復興が試みられたものの延暦寺僧侶による「山門八講」は実現しなかった。

ただ中世以降も、50年に一度の式年大祭・萬燈祭で延暦寺から僧侶を迎えて法要を営んできた記録が文献等で残されており、交流は続いていたという。また、明治の神仏分離令まで同宮は曼殊院門跡が別当職を務めており、延暦寺とは深い縁で結ばれていた。今回は、25年ごとに営まれる菅公一千二百二十五年半萬燈祭を7年後に控え、新型コロナウイルス感染症や天災の脅威にさらされている現状への



僧侶と神職が共に本殿へ参進

憂慮から、神仏習合で世界の平安を祈願すべく、実に550年ぶりに復興させた。法要は午前10時から始まり、七条袈裟を纏った延暦寺僧侶らが本殿まで向かい、曼殊院門跡の藤光賢門主と橘宮司ら神職が三光門で出迎え、合流してから共に参進した。八講壇が設けられた本殿では、橘宮司の祝詞奏上に続いて、森川座主猊下が祭文を奉じられ、玉串を奉奠された。そして8名の僧侶らが講経論議を祭神に奉納した。法要後、橘宮司は「明治以降途絶えていた神仏習合の祈りの復興は私の人生で最高の感動だった」と述べた。また水尾寂芳延暦寺執行は「明治以来の神仏習合の祈りが復興できたことは北野天満宮様の熱い思いがあったからこそ。ご縁を賜り有り難く勤めさせていただいた。今後も続けていければありがたい」と話した。

極微

8月15日の終戦記念日も過ぎて、今年もはや秋の候となった。終戦記念日の頃になると毎年のごとく、なにごとでも本は無謀な戦争を起したのだろうか、

という思いに至る▼終戦から長い年月が過ぎ去った。戦後も75年という年月を経ると、戦争を直接体験した存命者は少なくなってきた。終戦の年に生まれた人でも75歳になるのだから無理もない▼戦争の歴史を説明する文には、数字が多々出てくる。戦闘がいくつあり、その戦いで犠牲者は何名といったデータで記録されている。後年、それを資料として読む段になると、抽象的というか間接的なイメージしか頭に浮かばない。それだけに戦争における実体験を聞くことができたとき、数値を数値としてだけ捉えてはならないことが痛切に分かる。これは、戦争とは一人ひとりの、個々の体験であることが明確に分かるからである。いうならば、個々の顔がはつきりと刻まれている事実、それも悲惨な事実だからだ▼今年には、終戦にまつわる様々な追悼行事も、コロナ禍の影響で参加者の制限、式典の縮小などがなされた。テレビでその様子が報道される時、戦争犠牲者の名前が刻まれた銘板が映し出される場面に出会った。一人ひとりの名前を見るとき、「この人の最期はどうであったろう」という思いが湧いてくる。一つ一つの死には悲しい現実が存在するのだ。